

あの“青学”の理事長 羽坂勇司先生



「エッ！ あの青学の…」

どなたも一驚して、なぜ歯医者さんが？と問い返される。

平成元年（1989）の秋、羽坂勇司先生（41回卒）が、開館まもない新潟の医の博物館を来訪された。歯科医学史に造詣の深い先生を案内しながら、私は、先生が学校法人青山学院の理事長代行になられた、と知ってビックリした。

それには、私なりの理由があった。昭和46年（1971）秋に、文部省による新潟歯学部の視察があった。それは、新潟歯学部の開設が認可されるか否か、の重大な実地調査であった。その大学設置審議会の主査としてみえたのが、青山学院理事長・院長の大木金次郎委員であった。当時、大木氏は、私立大学はもとより文教関係のドンと噂されていた。

応接室で10分あまり取りとめのない話をしたが、30歳の若僧だった私は、悠揚迫らぬ貫録のまえに身を疎めていた。だから、羽坂先生があの大木理事長の“後任”とは、私には寝耳に水であった。あの名門の“青学”と横浜で開業される羽坂先生が、にわ

かには結びつかなかったのだ。

青山学院は、今年創立140周年を迎えて、大学9学部と大学院、女子短大、幼稚園から高等部を有し、大学生総数1万7千5百名を数える総合大学である。その青学は羽坂先生の母校であり、昭和52年より法人理事の重責にあったことは、あとで知った。翌年の平成2年、大木理事長の逝去により、先生は図らずも理事長に就任されたと仄聞した。

想えば、来館された折、先生の少々甲高い切々とした語り口、誠実で謙虚な人柄。その飾らない温容には、すでに青学のトップの品格が漂っていた。

先生は理事長として、新しい相模原キャンパスの開設、青山キャンパスの統合整備など、数々の学院発展に尽力され、平成17年（2005）に16年間におよぶ理事長職を全うされた。

現在94歳、羽坂先生は本学卒業生のなかで、まことに稀有な異色の雄飛をされた巨人である。

（写真は、『目で見ると西洋の歯に関する歴史』出版記念会と先生の叙勲を兼ねた御祝で、卒業生の十二代目市川團十郎御夫妻とならぶ羽坂先生・左）

＜お詫び＞40巻2号「中原 泉 一枚の写真 ⑱」におきまして、現在もご健勝である大町正武 先生（40・島根）のお名前が掲載されておりました。謹んで訂正とともにお詫び申し上げます。
また、お名前の記載に誤りがありました。下記のとおり訂正し、お詫び申し上げます。
（誤）尾崎精一 先生 → （正）尾崎清一 先生